76　田中彌性園収蔵小野蘭山書簡およびその学統について

田中　祐尾
大阪市立大学医学部

小野蘭山（1729～1810）が弟子の物部主鈴に宛てた書簡で，寛政から文化期にかけてのものと推定される．時候の挨拶から始まり金一封の礼をのべ，そのあと博物学的物品名があり「牛膝」を恵贈された確認と，「虫介三品」を遣わされたが即刻書き加えて返送しましたとあり，明日のご不参について承知したといって終っている．牛膝（ゴシツ）はイノコヅチのこと．利尿，強精，堕胎薬としても使われた．虫介ということばは，小野蘭山の本草学の師松岡恕庵が動植物や鉱物を9種に分けた著書「怡顔斎何品」に，桜品，梅品，蘭品，竹品，菓品，菌品，介品，石品とあり，その内の介品に属するもで，その三品という意味と推定される．

故中野操氏の論文「京都蘭学史要（醫譚31号昭和32年）」によると「本草学の学統関係図」として伊藤仁斎（古学）―稲生若水－松岡恕庵（野呂元丈）－小野蘭山－三谷公器とある．彌性園文庫には小野蘭山までの歴代の人々の書簡が遺されており，三谷公器については文化癸酉（1813）刊「解体發蒙」五巻が遺っている．彌性園八代当主田中元緝は大坂の本草学者木村兼葭堂の弟子であり兼葭堂は小野蘭山の高弟としての記録がある．そこで木村兼葭堂から田中元緝という学系を小野蘭山に繋ぎそれぞれの書簡を示す．

伊藤仁斎は京都古義堂で多様化した儒学を論語の哲学に回帰させる運動即ち古学を提唱し，その謂わんとする儒学の奥儀が当時の本草学者や医師たちの間に興った傷寒論復帰という風潮とマッチして後藤昆山（1659～1733）らがこの医学を実践しようとした．古醫方の流れである．田中彌性園文庫にただ一つ書簡（軸）が遺っている．

稲生若水（1655～1715）は山城国淀藩の侍医稲生恒軒の長男．藩主前田綱紀の命で「庶物類纂」の編纂にかかり未完で死ぬが，死後将軍吉宗の命で弟子たちが同1,000巻を完成させた．度重なる飢饉や疾病への対策として，動植物鉱物に亘る有用な分析分類が為政者にとっての急務だった．文面は佐藤将監宛で同じく物品名を追うと，「異木奇草」とか「穀精草十茎」といった表現で本草植物の珍種や種子を示す．「海鹿」とはアメフラシのことで被鰓目の海産腹足類に屬する巻貝の仲間．

松岡玄達（恕庵）（1668～1746）は京都で医学を学ぶ傍ら儒学を伊藤仁斎に学んだが詩経に出てくる動植物の名の理解に苦しみ，本草学者稲生若水の門に入った．幕府の和薬改会所に派遣され飢饉対策や殖産に寄与して日本本草学の基礎を築いたのち，門弟小野蘭山がこれを引き継いで日本国としての本草学が確立された．蘭山がのちに日本のリンネと呼ばれた所以である．

書簡は師稲生若水へのもので，文中「いのへとノ種子」とあり自分にも戴きたく「蒔植へ見申度候」とつづくが，そのあと「朝鮮人行列」云々とあるのは時期的に見ておそらく正徳元年（1711）の第8回の朝鮮通信使行列のことを指し，彼らが何れのルートを通るか，また彼らとの本草学上の接触を画策しているような文面である．

木村兼葭堂（1736～1802）は大坂商人の儒者，画家，詩文家で本草学を小野蘭山に学ぶ．多芸多才で博物学の領域に迫る蒐集を試み，世界的スケールの貝の蒐集が残っている．当時の薬草や珍種稀種を取引する「物産会」にも加わり，蔵書数も屈指であった．

田中彌性園八代当主元緝へのこの書簡には，当時オランダ渡りの顕微鏡の模造に苦心していた最中で，レンズ磨きのための良質「金剛砂」とか偏光カバーグラスとしての「雲母」の薄片などの入手を依頼している．

以上，稲生若水から松岡恕庵，小野蘭山，木村兼葭堂といった本草学者の学統にみる書簡中の博物学的物品名を辿ることで，すべての書簡に活発に薬草薬物の品目が見られ，その誰にも活発で自由なネットワークの上での活動が垣間見られて，今から二百年以前の内容としては誠に新鮮な意欲が感ぜられる．

最後に彌性園主八代元緝九代元資は懐徳堂中井竹山，履軒に師事して『大日本史』の書写を許されるほどの儒学への没入を果たしが，現在百冊の写本がそのまま残っている．